

## 提案概要

### 1. 名 称

伝統建築<sup>こうしやう</sup>工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術

### 2. 内 容

木・草・土などの自然素材を建築空間に生かす知恵，周期的な保存修理を見据えた材料の採取や再利用，健全な建築当初の部材とやむを得ず取り替える部材との調和や一体化を実現する高度な木工・屋根<sup>ぶき</sup>葺・左官・装飾・畳など，建築遺産とともに古代から途絶えることなく伝統を受け継ぎながら，工夫を重ねて発展してきた伝統建築技術。

### 3. 分 野

伝統工芸技術，自然及び万物に関する知識及び慣習

### 4. 構 成

国の選定保存技術のうち以下の17件。

「建造物修理」，「建造物木工」，「檜皮<sup>ひわだぶき</sup>葺・柿<sup>こけらぶき</sup>葺」，「茅<sup>かやぶき</sup>葺」，「檜皮採取」，「屋根板製作」，「茅採取」，「建造物装飾」，「建造物彩色<sup>さいしき</sup>」，「建造物漆塗<sup>うるしぬり</sup>」，「屋根瓦<sup>がわらぶき</sup>葺（本瓦葺）」，「左官（日本壁）」，「建具製作」，「畳製作」，「装潢修理技術」，「日本産漆生産・精製」，「縁付金箔製造<sup>えんつけきんぱく</sup>」

### 5. 保護措置

伝承者養成，研修発表，技術・技能錬磨，記録作成，原材料・用具の確保 等

### 6. 提案要旨

○木工・屋根<sup>ぶき</sup>葺・左官・装飾・畳などの伝統建築修理の技術は，木・草・土などの脆弱<sup>ぜいじやく</sup>な自然素材で地震や台風に耐える構造と豊かな建築空間を生み出し，法隆寺をはじめとする歴史的建築遺産に不可欠な保存修理においては，建築当初の部材とやむを得ず取り替える部材との調和や一体化を実現する高度な技術であり，棟梁<sup>とうりやう</sup>を中心とする職種を越えた組織の下，伝統を受け継ぎながら，工夫を重ねて発展してきた。

○歴史的建築遺産と技術の継承を実現する適切な周期の保存修理は，郷土の絆<sup>きずな</sup>や歴史を確かめる行事であり，多様な森や草原等の保全を木材<sup>ひわだ</sup>，檜皮<sup>かや</sup>，茅，漆，い草などの資材育成と採取のサイクルによって実現するなど，持続可能な開発に寄与するものである。

○このような「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」のユネスコ無形文化遺産代表一覧表への記載は，法隆寺をはじめとする世界文化遺産となった木造建造物や，日本の建築文化を支える無形文化遺産の保護・伝承の事例として，世界の建築に関わる職人や専門家との技術の交流，対話が深められ，国際社会における無形文化遺産の保護の取組に大きく貢献するものである。

伝統建築<sup>こゝろ</sup>工匠<sup>しよ</sup>の技: 木造建造物を受け継ぐための伝統技術

	選定保存技術	保存団体
1	建造物修理	(公財)文化財建造物保存技術協会
2	建造物木工	
3	ひわだ <sup>がき</sup> 檜皮葺・ <sup>こけら</sup> 柿葺	(公社)全国社寺等屋根工事技術保存会
4	かや <sup>がき</sup> 茅葺	
5	ひわだ 檜皮採取	
6	屋根板製作	
7	かや 茅採取	(一社)日本茅葺き文化協会
8	建造物装飾	(一社)社寺建造物美術保存技術協会
9	建造物 <sup>いしき</sup> 彩色	(公財)日光社寺文化財保存会
10	建造物 <sup>うるしぬり</sup> 漆塗	
11	屋根瓦葺 <sup>ほんがわら</sup> (本瓦葺)	(一社)日本伝統瓦技術保存会
12	左官(日本壁)	全国文化財壁技術保存会
13	建具製作	(一財)全国伝統建具技術保存会
14	畳製作	文化財畳保存会
15	<sup>そうこう</sup> 装演修理技術	(一社)国宝修理装演師連盟
16	日本産漆生産・精製	日本文化財漆協会
		日本うるし掻き技術保存会
17	<sup>えんつけ</sup> 縁付 <sup>きんぱく</sup> 金箔製造	金沢金箔伝統技術保存会

※文化財保護法に基づく国の選定保存技術 17件(14団体)

## 2. 建造物木工（けんぞうぶつもっこう）

選定年月日：昭和51年5月4日

保存団体名：（公財）文化財建造物保存技術協会，（一社）法人日本伝統建築技術保存会

概要：

我が国の建造物は近年まで木造がその主流であり，したがって建築技術は木工技術によって代表され，それは世界に類例稀<sup>まれ</sup>なほど精巧な成果を示すものである。しかし，近年では，材料，工具等の変化や，いわゆる近代建築の隆盛に伴って，古式の木工技術を体得する者は少なく，しだいに技術水準が低下しつつある。特に文化財建造物の保存修理に当たっては，各時代の木工技術の正確な踏襲，再現が求められるところから，現在数少ない木工技能者が体得している古式の木工技術を伝承し，錬磨してその水準を確保する必要がある。



古式の木工技術による修理の様子

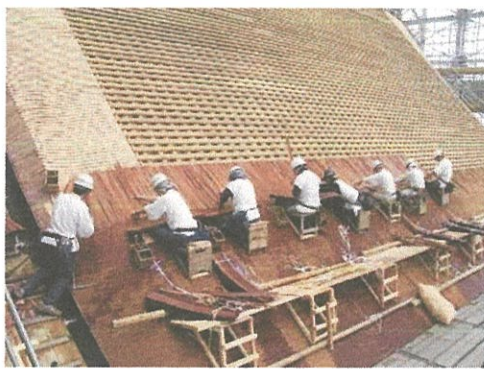
### 3. 檜皮葺・柿葺（ひわだぶき・こけらぶき）

選定年月日：昭和51年5月4日

保存団体名：（公社）全国社寺等屋根工事技術保存会

概要：

檜皮葺及び柿葺の技術は、建造物の屋根葺技術として我が国特有のものである。この技術の発祥は詳らかでないが、檜皮葺は8世紀の中ごろに既に用いられており、柿葺は古く発生した板葺を源流とし、中世の末にはその技法が定着し大成したとみられている。現在、多数の檜皮葺・柿葺の建造物が、重要文化財として保護されており、これらの建造物を保存するためには檜皮葺・柿葺の技術は欠くことのできないものである。一般の建築ではほとんど用いられなくなりつつあり、伝承が困難となっていたが、保存会の取組により技術者の数が回復しつつある。



檜皮葺の様子



柿葺の様子

## 4. 茅葺（かやぶき）

選定年月日：昭和55年4月21日

保存団体名：（公社）全国社寺等屋根工事技術保存会

概要：

茅葺<sup>かやぶき</sup>は、我が国では草葺<sup>くさぶき</sup>の一種として古くから建造物の種類と地域を問わず広範囲に使用され、農・山村の民家では、今なお若干ながらそれを見ることが出来る。しかし、一般には茅場制度の消滅と原野の開発によって良質の茅<sup>かやて</sup>が得られなくなり、「茅手」と呼ばれた葺師<sup>ふきし</sup>も年とともに減少し、現在では兼業としてわずかにその技術を伝えているにすぎず、それも高齢化して、一般の需要がない今日では、専業として成り立たないことから後継者を育成することも困難となっている。

茅葺は、古代に行われたと考えられる「元吊り<sup>もとづ</sup>」の工法から次第に改良されて近世には既に現在みられる工法になっていたと思われるが、なお地域的には幾つかの技法の差がみられ、それが茅葺の地方色として伝統的に残されている。

現在重要文化財として保存されている茅葺の建造物を維持し、後世に伝えるためには茅葺の技術は欠くことができない重要な技術である。



茅葺の様子

## 5. 檜皮採取（ひわださいしゅ）

選定年月日：平成30年9月25日

保存団体名：（公社）全国社寺等屋根工事技術保存会

概要：

檜皮採取<sup>ひわださいしゅ</sup>とは、屋根葺の一種で社寺に多く見られる檜皮葺に用いるため、80から100年生以上の檜<sup>たちき</sup>の立木から、樹皮である檜皮を剥ぎ取る技術である。立木の檜は10年ほどで樹皮が形成され、再び採取が可能となるが、そのために樹皮下の形成層を傷つけない技術が必要である。檜の立木の下部からへらを入れ、<sup>じょうほう</sup>上方にめくり上げ、<sup>あさなわ</sup>麻縄を巧みに使って足掛かりとして、高い木では20メートル以上まで登り剥いでいく。

檜皮の採取は樹皮の形成期間である4月から7月までは剥ぐことができず、労働期間が限定される。単独で山中深く入り、高い木に登る等、危険を伴い、採取した檜皮を担いで山裾まで下ろす等、重労働も要求される。

現在重要文化財として保存されている檜皮葺の建造物を維持し、後世に伝えるためには檜皮採取の技術は欠くことができない重要な技術である。



檜皮採取の様子



拵え作業の様子

## 6. 屋根板製作（やねいたせいさく）

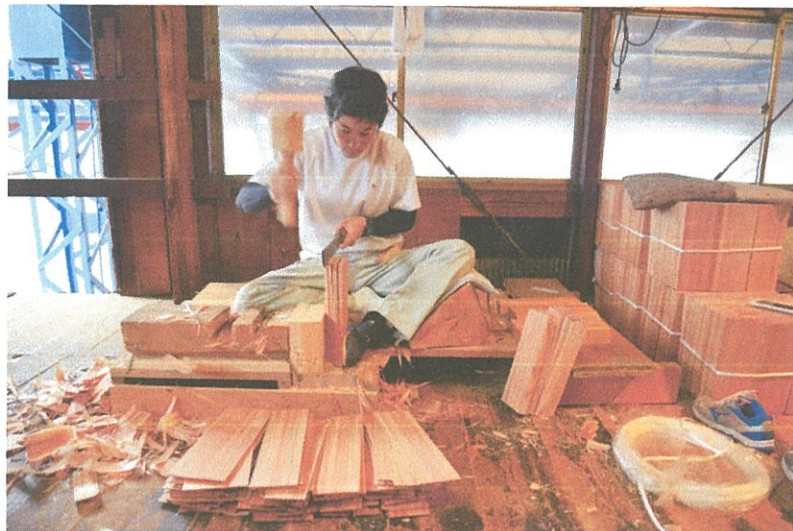
選定年月日：平成30年9月25日

保存団体名：（公社）全国社寺等屋根工事技術保存会

概要：

屋根板製作とは、屋根葺の一種で柿葺、栩葺、瓦葺下地の土居葺に用いるため、榧さわりや杉すぎ等の木材を手作業で割り、形状を整えて屋根葺に適した板を製作する技術である。屋根面に葺く平葺板ひらぶきいた、軒先に使用する軒付板のきづけいたや上目板うわめいた、曲面部に使用する隅板等すみいた、用途に応じた仕様があり、板の厚さや長さも多様である。原木の良否を見極め、良質の板を、手際良く大量に製作することが重要で、熟練が求められる。

板葺屋根の耐用年限は20年から30年程度であり、重要文化財となっている多くの建造物の保存継承のためには、屋根板製作の技術は欠くことのできない重要な技術である。



屋根板製作の様子

## 8. 建造物装飾（けんぞうぶつそうしょく）

選定年月日：平成19年9月6日

保存団体名：（一社）社寺建造物美術保存技術協会

概要：

文化財建造物を装飾する技術には、<sup>うるしぬり</sup>漆塗、<sup>さいしき</sup>彩色、<sup>かざり</sup>鏝金具製作、<sup>いもの</sup>鋳物製作、鍛冶技術などがある。特に仏教伝来とともに様々な技術が伝わって、古代仏堂が華麗に彩られ、やがて寺院以外の建造物にも盛んに用いられるようになった。

これらの技術は、建造物を装うという意匠性だけでなく、部材表面の風化抑制などの機能性も担っている。建造物の修理においては、その両者を考慮して適切な技法を吟味して施工する必要がある、そのためには豊富な知見と熟練が求められる。

また建造物の保存修理を適切な周期で行うためには、これらの技術の円滑な継承が不可欠である。



鏝金具製作の様子



## 1 1. 屋根瓦葺（本瓦葺）（やねがわらぶき（ほんがわらぶき））

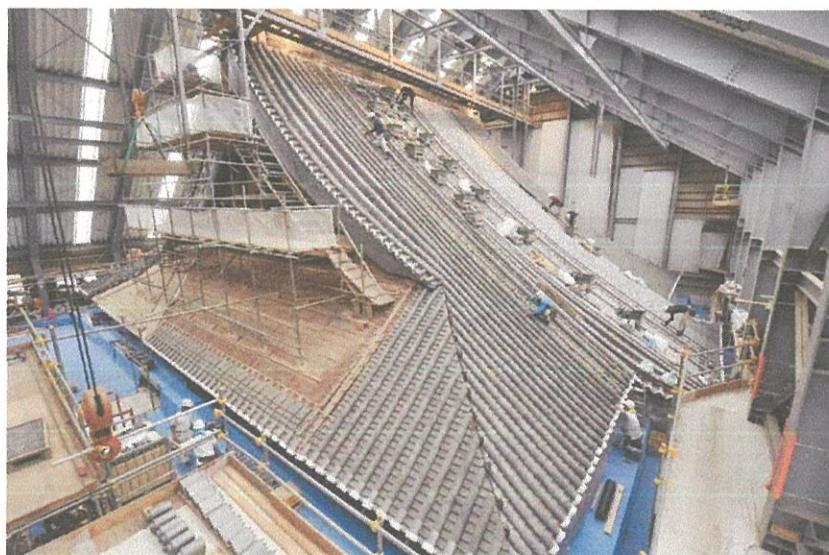
選定年月日：平成6年6月27日

保存団体名：（一社）日本伝統瓦技術保存会

概要：

寺院建築や城郭建築をはじめとする我が国の伝統的な建造物には、<sup>ほんがわらぶき</sup>本瓦葺が多く用いられている。

本瓦葺の技術は、再用可能な古瓦をどこまで使用できるかを判別し、新しい瓦との調和のとれた使い方、棟や谷部の雨や強風に対する対策を考え、軒の<sup>そ</sup>反りや屋根の優美な曲線を伝統的技術で<sup>ふ</sup>葺き上げるためには、高度な判断と技能が要求されることから、文化財建造物の保存修理工事において最も重要な技術の一つである。現代においては、この技能を高度に体得した技能者は次第に減少しつつあるが、本瓦葺の技術は、本瓦葺の文化財建造物を後世に継承していくために欠くことのできない技術である。



本瓦葺の様子

## 12. 左官（日本壁）（さかん（にほんかべ））

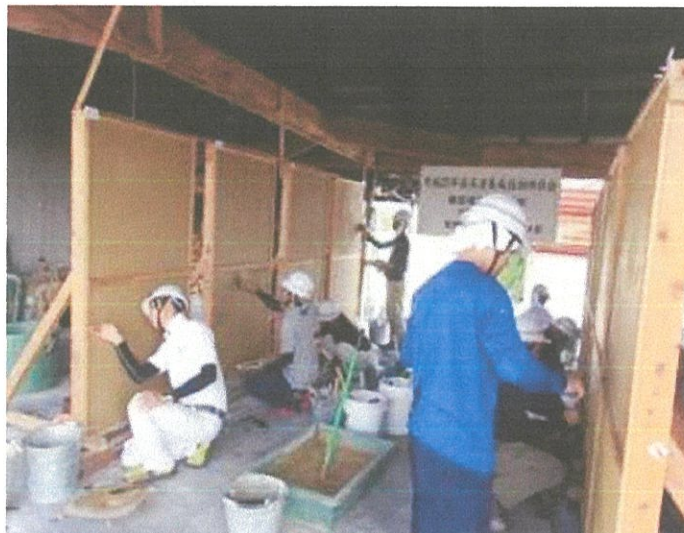
選定年月日：平成14年7月8日

保存団体名：全国文化財壁技術保存会

概要：

左官の職名は近世初期には見られ、それ以前には「泥工」「壁塗り」とも称された。我が国の伝統的左官技術には、表面を土で仕上げる古式京壁と、漆喰<sup>しっくい</sup>仕上げとする漆喰壁があり、日本壁と総称される。

良質の日本壁を製作するためには、各種素材の吟味から施工まで高度な熟練が必要であり、文化財建造物修理においては、製作された壁の強度や美観が修理工事の良否に大きく影響する。しかし、日本壁製作のような湿式工法には十分な工期と経験が必要であるため、熟練した、良質な日本壁を製作できる技術者を確保していく必要がある。



左官技術研修の様子

### 13. 建具製作（たてぐせいさく）

選定年月日：平成11年6月21日

保存団体名：（一財）全国伝統建具技術保存会

概要：

建具の製作は木取り、矯正、削加工<sup>けずり</sup>、寸法決め、仕口加工<sup>しぐち</sup>、仕上加工<sup>しあげ</sup>、組立<sup>くみだて</sup>の順で行われる。小片の部材を複数組み合わせられて作られ、大工仕事とは異なり、一厘、二厘をゆるがせにできず、また、隠れるところがほとんどないため仕事に逃げ場がなく、わずかな狂いやキズも許されず、極めて細かい神経と高度な技術、それに豊富な経験が必要である。近年の一般建築界では、建具を修理して使用することが無くなりつつあるが、文化財建造物に使われている建具の維持のためには、建具製作の高度な技術を体得した技術者を確保していく必要がある。



建具製作研修の様子

## 14. 畳製作（たたみせいさく）

選定年月日：平成16年9月2日

保存団体名：文化財畳保存会

概要：

畳は、貴族邸宅である寝殿造建築<sup>しんでんづくり</sup>での座具や寝具、寝台の上敷<sup>うわしき</sup>として使用され、後に、室内周囲に「追い回し」に敷かれたり、室内全体に敷き詰められるようになった。やがて室町時代<sup>しよいんづくり</sup>ころには書院造建築の発展とともに畳を敷き詰める習慣が広まり、近世以降、一般住宅にも徐々に浸透した。

畳は、稲藁<sup>いなわら</sup>を交互に積み重ねて麻糸で縫い締めた畳床<sup>たたみどこ</sup>に、い草を編んだ畳表<sup>たたみおもて</sup>を張り、両側に畳縁<sup>たたみべり</sup>を縫い付けて仕上げる。

畳製作技術は、多様な規模や形状の部屋を正確に採寸して、規格外の畳を加工し、特殊な紋縁<sup>もんべり</sup>を畳相互の紋合わせに注意して縫い付け、敷き込む技術で、その一連の工程には高度な熟練を要する。伝統的な畳製作技術を有する技能者の確保が不可欠となっている。



畳製作の様子